

成年生まれ わんわん 大いに語る



平成18年生 12歳 (南) 大平朱夏

新年あけましておめでとうございます。
私は、今年で六年生になります。ついさっきが一年生だったような気がして、月日が過ぎるのを早く感じ



昭和57年生 36歳 (伊久間) 吉川遼子

新年あけましておめでとうございます。
早いもので三度目の成年を迎えたことに大変驚いて

私は中学入学と同時に両親の実家がある喬木村に引越してきました。高校を卒業後は五年ほど県外にいま

ます。昨年、どんな六年生になりたいかクラスで考えた時、「あいさつ、返事やましい」などの意見が出ました。そして、クラスであいさつをがんばって来ました。クラスではあいさつが出来てい

と大きな声であいさつをしていてすごいと思いました。私は、今年で六年生になるので、全校をひっぱって

ろをかを走らないようにしています。これからは、下級生に「あんな六年生になりたい。」と思ってもらえる六年生になりたいです。

私が、一番いいと思うのは、学校が明るく楽しい学校で、学校に行く事が一日の楽しみになるといいと思います。なので、明るく楽しい学校にしたいです。



昭和45年生 48歳 (北) 知久隆文

新年あけましておめでとうございます。
驚きですね。もう四十八になるというのに実感がありません。もう一回りする

「人生裏方」が自分のモットーです。周りを盛り上げていけるよう、目標に向かって確実に前進できる年にしていきたいと思います。

ジが頭に浮かびます。しかし、七十七年後の二〇一八年では自分自身、六十歳は決しておじいさんじゃないと強く言いたい今日この頃。さて、昭和三十三年に生まれて十二年目の成年は中学校の頃です。旧喬木中学校校舎はしばらく前に取り壊し移転して現在は体育館を残すのみ、椋鳩十記念館と学遊館が跡地に建設されています。私自身も家庭を持ち、子どもが中学校に上がるとPTA絡みで新中学校の校舎に入ることが多くなりました。そんな折、前から気になっていたのですが現在の中学校の職員室前のショーウィンドウの中に、「青春の詩」があつたような気がしてならないのです。私が中学の当事に見たものと同じかどうかはわかりませんが、その詩の内容には衝撃を受けました。



昭和33年生 60歳 (富田) 田中生輝

村の渡しの船頭さんはむかし六十のおじいさん。年はとつてもお舟をこぐときは元氣いっぱい櫂がしなる。一九四一年発表の童謡「船頭さん」の歌詞の一節です。今でも私には六十と聞くと「おじいさん」のイメージ

若くあるためには、創造力、時代でした。昨年、古希の同年会を行い喬木中学校の同年会と再会しましたが、それぞれに年輪を重ね、社会の第一線で活躍してきた姿を伺うことができました。現在、私も議会の方でお世話になっていますが、次八回目の成年には喬木村の様相も大きく変わり、リニア・三遠南信道路が開通し、高速交通網の時代が訪れているものと思われ

強い意志・情熱・勇気が必要であり、安きに就こうとする心を叱咤する冒険への希求がなければならぬ。人間は年齢を重ねた時に老いるのではない。理想をなくしたときに老いるのである。歳月は人間の皮膚に皺を刻むが情熱の喪失は心に皺を作る。人間は信念とともに若くあり、疑念とともに老いる。自信とともに若くあり、恐怖とともに老いる。希望ある限り人間は若く、失望とともに老いるのである。(サムエル・ウルマン 抜粋) 還暦を迎え、体も心も柔軟性が無くなり「頑固」「一刻」という言葉が似合わぬようにいつまでも青春の気持ち忘れずにいたい!

編集後記

吾輩は犬である。名前はもうある。今年吾輩の年張り切って生きたい。吾輩の一日は朝六時の散歩から始まる。お母さんが雨の日も雪の日も毎日連れて行ってくれる。たまに「犬の散歩は犬を欲しがった者(娘)が行けばいい。犬をもらって来た者(お父さん)が行けばいい。」と心のつぶやきが聞こえてくる。息子も優しい。仕事でどんなに夜遅くなっても吾輩が「く〜ん」と泣けば必ず連れて行ってくれる。落ち葉の布団に丸くなって黄金色に背中を輝かせまどろむ。それが吾輩の一番の至福の時である。

たかぎ短歌会 師走歌会詠草

老け覚え孫にゆずりし柿作り
手伝い思えど踏ん張り効かず
この朝も源助かぶなに霜白く
赤味をおびて漬け頃となる
城址より眺める対岸明るみて
天竜川ゆたかに山里を縫う (松岡城址)
遠くより我を見つけて走り寄る
犬のタロウよひたに愛ほし
秋深み落ち葉降り敷く山道を
喘ぎあえぎて登る山城
にんにくと玉ねぎ植える山畑に
ポケットのラジオ励ましくれる

多田 昭
小椋 りよ
知久 美子
関島 春子
桐原 邦夫
木下 寿子

「総太りではないな」と夫の言う種子間達へしか今年の大根つれ添いし四十八年短かり
結婚記念日ささやかに祝う
採り立ての人参大根ネギ葉物籠にあふれて使へと誘ふ
今朝もまた視界さへぎる乳白色は
千し柿に良しとふ天竜川霧
逝く秋の寂しくなりしわが庭に
小ぶりの柿がたわわに実る
木犀の香り漂うわが寮の
「結の里」にも秋忍び寄る
やうやくに柿剥き終へし雨の夜
古賀メロディーのテレビに見入る
威厳あるネコ校長のひげ揺るる
廃校久しき山の分校

元島 康子
田中 妙子
内山 和子
市瀬 准子
原 健彦
大村 初見
木林 睦枝
福澤 亀人



昭和21年生 72歳 (富田) 木下温司

新年あけましておめでとうございます。生まれた時から数え七回目の成年を迎えることになりました。時の早さに驚かされます。今回原稿をお引き受けすることもた

めらいました。私も十五年間「館報たかぎ」の編集に関わり、原稿依頼の苦勞を知っていますのでお引き受けし

た次第です。編集部には平成二年ころから籍を置くようになり、その間二回の縮刷版の編集に携わったわけですが、平成三十一年の三月号で館報も六〇〇号を迎えることと思われ。昭和二十八年八月から発行された「館報たかぎ」の歴史を刻む歴史書として未永く生き続けることを願うもので